

姫路城復原に挑戦



姫路城復原模型（奥は、竹田城石垣模型と写真測量の成果の掲示）



左；模型三の丸本城部分

基礎史料では、建物平面しか描かれていない。そこから、棟の方向や形状、規模などの建物の上部構造を復原するのは専門家でも難しい。それを形にするのは、部員が最も苦勞した作業であったろう。



準備作業の様子

地歴部の展示では姫路城復原模型のほかに、ネアンデルタール人の復原や、校内で発見された甲冑（江戸時代のもの）展示とその解説、但馬竹田城跡石垣実測図とそれに基づいた立体模型など、バラエティに富んだものであった。個々のものは、もちろんプロの製作には遠く及ばない。展示方法も博物館学芸員からすれば、稚拙との評価が与えられるかもしれない。しかし、それぞれの展示には不思議と説得力があり、また見る者を惹きつけ、楽しさの感じられる素晴らしい展示であった。

姫路東高・地歴部が研究成果を発表



1999年4月2日、県立姫路東高校で文化祭が開催された。同校の地歴部（部長和田浩一君、部員34名）は、普段の活動成果のひとつとして姫路城内曲輪の復原模型を製作し、披露した。

この復原模型は、昨年「姫路城絵図展」において初めて公開された「播州姫路城図」（中根忠之氏蔵）をもとに製作された。同部員が、絵図展の図録に掲載された写真をもとに建物や庭などを作り、体裁を整えたものである。小さな写真を手がかりにここまで大きな模型を作るには、いろいろと試行錯誤があったにちがいない。しかし、その経験の中から、資料を観察しただけではわからなかったことが、彼らには見えてきたにちがいない。それは我々のように細かな部分で躊躇したり、あるいは専門家まかせにする者には、決して体得できない貴重な情報である。

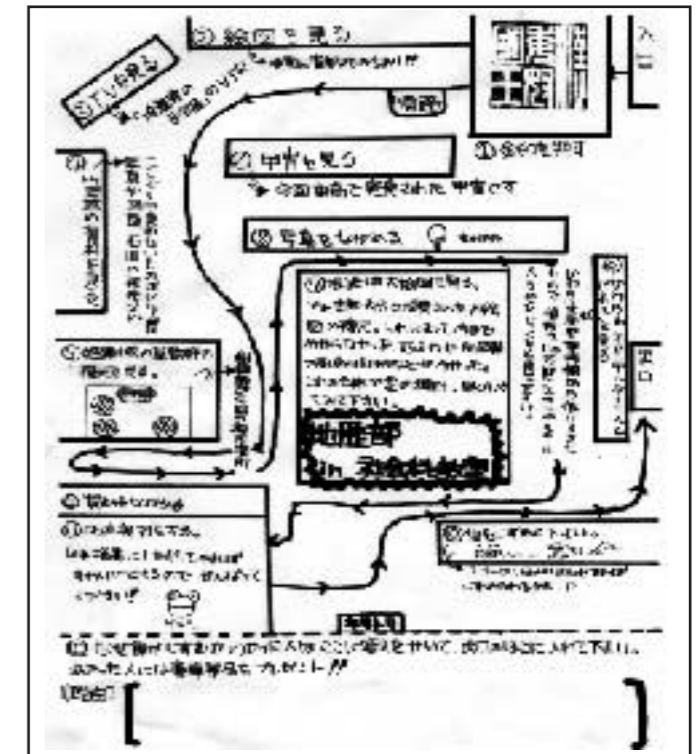
専門家からみれば高校生は「素人」ではあろう。しかし、だからこそ専門家にはない斬新な視点や発想が生まれるともいえる。高校生の仕事は無視できない。

復原模型は未完成で、これから修整を加えていくことになるようである。その完成もさることながら、姫路東高校地歴部員の今後の活動も非常に楽しみである。

右；部員の手作りによる展示ガイド

展示のほかに、拓本実習ができるなど体験型の要素も採用し、観覧者を飽きさせない工夫が光る。この体験コーナーでは部員が他の生徒を指導することになっている。事前の勉強が相当必要であったことだろう。ちなみに同部の展示には、一日で400人の入場者があったという。

（取材にあたり、地歴部顧問の平良哲夫教諭にお世話になりました。作業風景写真は、平良教諭提供）



「城踏」；韓国では、閏月に山城や邑城の城壁上を歩くと、年間足の病にならないという民俗儀礼がある。これをSungBapkiといい、あえて日本語に訳せば「城踏み」となる。



「城踏」の様子

"Shiro Fumi" No.3 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.